

校 園 名：金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校

所在地：〒921-8105 金沢市平和町1丁目1番地15号 電話番号：076-226-2121

記載日：平成28年4月28日 記載者：端崎 圭一 記載者役職：副校長

本校の校風、おおまかな特色について：

金沢大学教育学部に附属学校が設置されて以来、自由闊達な気風を尊び、生徒が自主的・自律的に生活をすることをモットーとした教育理念を伝統として、学習活動および学校運営に当たっています。

〔教育目標〕自由闊達な気風の中で、広い視野と豊かな人間性を持ち、将来、社会的使命を果たす生徒を育成する。

- 〔目指す生徒像〕①自ら考え学ぶ生徒
②お互いに認め合い、助け合う生徒
③心身ともにたくましい生徒

本校は、加賀百万石の藩祖前田利家公が眠る野田山の裾野に位置しています。各学年4学級、生徒数約480名、常勤教職員24名の中規模校です。金沢大学人間社会学域学校教育学類は、日本海側で唯一、全校種の学校園（幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校）を擁して教員養成や研究的実践を行っており、本校はその一翼を担っています。

伝統的な行事としては、昭和24年から取り組んでいる演劇（当初は学年劇。昭和49年からは3年クラス劇）と昭和57年から取り組んでいるシルエット劇が挙げられます。

部活動では、石川県内では珍しい硬式テニス部を設けており、これまで男女合わせて10回以上全国大会出場を果たしています。

本校の卒業生の活躍状況について：

- ①学校として、卒業生についての追跡調査は実施していません。
- ②生徒は、卒業時に同窓会（＝柏葉会）に入会します。会員名簿は柏葉会事務局が管理します。5年ごとに周年事業の一環として名簿データのメンテナンスを行っています。名簿のメンテナンスについては各期の評議員による取りまとめによって行われます。その名簿に、勤務先や在学している学校名が記載してあります。ただし、全員の状況が載っているわけではありません。
- ③記載されているものを見ると、多数の卒業生が国公立の有名大学に進学し、その後、県内外の優良企業や官公庁で勤務したり、医師や歯科医として活躍したりしていることが分かります。

本校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ①学校として、上記の先生方について追跡調査は実施していません。
- ②県内の教職員人事異動状況は、石川県教職員職員録で必要に応じて把握が可能です。
- ③異動後は、研究主任や教務主任のような学校の中心となる仕事を任されたり、県や市の教育委員会の指導主事を命じられたりするケースが多く見られます。その後は、指導教諭や主幹教諭、管理職になって学校運営に携わっていきます。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

本校は、国立教育政策研究所（以下、国研）のESD（Education for Sustainable Development；持続可能な開発のための教育）の指定研究を平成26・27年度の2年間受けました。ESDについては、平成24年3月に国研が発行したリーフレットに次のように書かれています。「ESDとは、環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点から、より質の高い生活を次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる開発や発展を目指した教育であり、持続可能な未来や社会の構築のために行動できる人の育成を目指しています。」また、ESDの視点に立った学習指導の目標として「教科等の学習を進める中で、『持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける』ことを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養う。」とあります。これらの説明をもとに、本校で設定した研究テーマは以下の通りです。

「持続可能な社会の形成者として必要な資質や能力の育成」
～教科間のつながりを目指したカリキュラム開発を通して～

馳浩文部科学大臣が平成28年年頭の所感（「中等教育資料 No.957」）において、「グローバル化に対応した教育環境づくりの観点から、外国語教育の強化、国際バカロレアの推進、ESDなどを進めます。」と述べられているように、ESDはこれからの国の教育施策の重要課題に位置付けられています。また、ESDに取り組むことは、平成27年8月にまとめられた教育課程企画特別部会論点整理に記載されている「育成すべき資質・能力を育む観点からの学習評価の充実」や「カリキュラム・マネジメントの充実」等と密接な関連を持っており、とても意義のあることであると考えます。国研の指定研究は2年間で終了しましたが、研究は本年度三年次を迎えており、これを県内外に発信することで、次期学習指導要領改訂をむかえる準備やこれから先の未来の日本社会づくりに資することを願っているところです。

さて、本校は指定研究を受けるまでに、各教科等における思考力・判断力・表現力等を育む場面や方策を研究してきました。この研究はESDが求める「批判的に考える力」「未来像を予測して計画を立てる力」「多面的・総合的に考える力」等の基盤になると思われまます。幾つかの先進校は、ESDに取り組む際に、総合的な学習の時間をその中心と位置付けていますが、本校のESD研究の特徴は、今までの研究をもとに、教科等の取組を主体としているところにあります。また、各教科が個別に取り組むのではなく、ESDに関係する教材の「つながり」や能力・態度の「つながり」を意識した授業実践を学校全体で体系的に行い、カリキュラム開発を行うところにもあります。以下、その実践を紹介します。

（1）教材の「つながり」を図る

ア．各教科等の年間指導計画の掲示とESD週間マイベストの実施

教材のつながりを図る際、他の教科等の学習内容を知ることは大切なことであり、内容的な「つながり」を図る第一歩であると考えました。そこで、校内に研究コーナーを設置し、各教科等の年間指導計画を貼り出し、学習内容がESDに関連しそうなものを黄色でハイライトしてもらいました。次に、教科書コーナーを設け他の教科等の教科書をいつでも参照できるようにしました。また、「ESD週間マイベスト」を実施しました。これは、各教員が1週間の授業の中で、ESDと関連しそうな授業を行ったことを書きとめ、内容が関連しそうな教科等の年間指導計画の下に貼りつけていくものです。研究コーナーで、他の教科等と連携できそうな内容を探すのみならず、他の教科等から自分の教科等と連携できそうだというメッセージを受け取ることもできるというわけです。日

頃、ESDの実践内容について話し合う時間がなかなかとれない中、こういった形で少しでもアイデアのやりとりができないかと考えました。

イ. 教材の「つながり」を考えるワークショップの開催とカリキュラムマップの作成

研究当初、教材の「つながり」を模索するワークショップを開催し、ESDに関する教材やそれらのつながりについて共通理解を深めてきました。ワークショップの時間は1回30分程度にとどめ、回数を重ねることで徐々に全体的な実践の方向を確認することができました。ワークショップでは、各教科等の教員がESDと深い関わりがありそうな教材や題材について付箋に書いたものを模造紙に貼って、グループ化していく中で、内容的な「つながり」を図っていくという方法を初年度にとりました。そして、それらの教材や題材について整理するために、横軸に1学年4月～3学年3月の時間をとり、縦軸にESDに関わる環境や国際理解等の「分野」をとったカリキュラムマップを試作しました。この年度では、すべての教材や題材について授業実践をしたのではなく、実践可能なものや実践予定のものをカリキュラムマップに網羅しました。研究二年次には、試作したカリキュラムマップを拡大印刷して掲示し、それをもとに話し合いを行いました。まず、実際に実践できそうな内容を精選し、内容のつながりが強く、連携が確定した実践グループ(ユニット)を作っていました。次に、それらのユニットの中に育みたい能力・態度を教科等ごとに位置づけ、その中で生徒にどのような力を育ませるのかを見えるようにしました。

(2) 能力・態度の「つながり」を図る

ア. 能力・態度に関する生徒アンケートの実施と本校生徒の実態把握

アンケートは、国研が示すESDに関わる能力・態度の項目と対応する形で作成し、年度初めと11月の年2回アンケートを実施することで、生徒の実態を比較できるようにしました。これにより、年度初めのアンケート結果から生徒の実態を把握し、それに応じた課題を取りあげ、課題を解決するための授業実践を行い、また、11月のアンケート結果から、それらの実践について成果と課題を分析し、さらに次年度の実践につなげることができると考えました。

イ. 教科等の思考力・判断力・表現力等との関連例の一覧表の作成

各教科等において、カリキュラムマップに載せた実践を中心に、育みたい能力・態度や各教科等の思考力・判断力・表現力等との関連を一覧表にまとめました。他の教科等の考えについて共通理解を図ることで、学校全体で生徒にどのような力を付けさせているかが見えやすくなりました。一覧表の作成は、教科等の特性に応じた能力・態度の育成の分担や連携につながり、授業実践の内容的な「つながり」に加えて、さらなるカリキュラム・マネジメントにもつながるのではないかと考えました。

(3) ESDに関連した授業実践の充実を図る

ア. 小グループでの研究授業の実施とそのグループでの授業整理会の開催

授業の充実を図るには、研究授業を行い様々な議論を重ねる必要がありますが、研究授業の回数を増やし授業整理会での議論を深めるために、5、6、7月に、それぞれ3つのグループを作って計9回の研究授業を行いました。また、授業整理会もそのグループ毎に行い、整理会終了後、全体で各グループから出た意見を共有することにしました。大学教員も参加してもらいました。

イ. 実践事例を書き、カリキュラムマップとの整合性を図る

ESDに関する授業実践は、授業実践記録にまとめました。項目や書式をそろえることで、それぞれの授業を同じ視点で見直すことができ、他の教科等がそれを参考にして新たな授業実践を生み出すきっかけにもなりました。また、授業実践記録には、ユニット番号や実施順を明記し、カリキュラムマップに記載したユニット番号や実施順との整合性を図ることで、各教科等の担当者や担当学年が変わっても、同じような実践ができるようにしました。

地域において、現在、本校はどのような存在であると考えているか：

約 20 年前、附属高等学校の隣接地に、幼稚園・小学校・中学校が同時に移転をして平和町キャンパスができました。それ以来、町会長等の地域役員が集まる連絡協議会に学校の代表も呼ばれ、地域の現状報告や課題解決、将来計画等の検討に参加しています。そのような場においては、生徒の住居が必ずしもこの地域になくとも、地域の方々が附属学校園の人やモノを地域の重要な存在であると考えてくださっていることを常々強く感じます。

例えば、生徒の通学に関して、移転以来、通学安全確保のために校舎後ろの道路が朝の時間帯に一方通行に変更され、地域の方々は大変不便な思いをされています。にもかかわらず、苦情を言うどころか、毎日、「見守り隊」の方々は、登下校している生徒たちの通学状況を温かく見守り、声をかけたりもしてくれています。時には、その状況を学校に知らせてくださいます。見守り隊長からは「附属の生徒も、公立学校の生徒も同じである」という言葉をもらっています。

また、施設利用に関して、駐車場や体育施設を地域の方々に貸与することがあります。さらに、数年前から、体育館が金沢市の避難場所に指定され、非常時には、地域の方々が学校を使用することになりました。すでに地域にはなくてはならない存在になっています。

学習活動に目を移すと、生徒たちが総合学習の調べ活動や職場体験等で地域に出かけることがあります。その際には、快く生徒のインタビューに答えてくださったり、数日にわたって丁寧な指導をしてくださったりします。学校としても地域の協力はなくてはならない存在になっています。

20 年の月日をふり返ると、学校と地域の双方が、少しずつ良い関係を築いてきたという実感があります。ただ、学校からの地域への積極的なアプローチは欠かせません。附属学校といえども、地域との関係強化をより図る学校マネジメントを進めたいと思います。

附属学校の存在意義、本校の存在意義について：

本校についていうと、教職員が金沢大学教員と、学校研究レベルと各教科レベルで不断に連携を図っており、高度な理論的アドバイスを受けています。それを受けての実践を研究発表会等で県内外に発信しています。また、平成 24 年から平成 27 年の 4 年間、国立教育政策研究所の指定研究を受けた際には、アドバイザーとして大学教員には頻繁に関わってもらうことができました。このように大学の教育実践理論をダイレクトに反映できるのが附属学校の強みであると考えます。

また、平成 28 年度より金沢大学に教職実践研究科、いわゆる、教職大学院が設置されました。この大学院は、大学に蓄積された教育実践研究に関する知見と、石川県教育委員会・県下協力校・本学附属学校園との連携実績をふまえながら、“理論と実践の往還”を深化させたカリキュラムによって、教育実践力を更に高めるという主旨で設立されました。大学院には「学校マネジメントコース」と「学習デザインコース」の 2 コースがありますが、それぞれのコースにおいて附属学校の果たす役割は非常に大きいと認識しています。

具体的には、「学校マネジメントコース」において、教育委員会から派遣された現職教員が、定期的に附属学校を訪問して、附属学校で取組んでいる学校経営を通してマネジメントに関する見識を深めます。「学習デザインコース」においては、現職教員とストレートマスターの院生が、定期的に附属学校を訪問すると同時に、9 月のひと月間は附属学校に常駐し、附属学校教員の生徒の実態に即した指導・助言を通して授業設計に関する見識を深めます。いずれのコースにおいても、院生が、二年目に学校現場に戻って取り組む学校経営や授業等に関わる各自の課題を明確にし、それらの改善のための研究課題を設定することに、附属学校は実験校として、これから大いに貢献することが期待されています。